
いつまでも

紀璃人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつまでも

【Nコード】
N6898T

【作者名】
紀璃人

【あらすじ】
アリマリで激甘からのシリーズ。
この作品は最近書いたもので、紀璃人史上最長の作品となりました。
いました。

ですので細かく区切って出しているこうと思います。
SS書きとして、やるなら長編はあまり出したいくないのですが…。
まあ、しょうがないですかね。
一応の力作（になる予定）ですので楽しんでいただければと。

追記(6/10)

300人もの方にご愛読いただき、ありがとうございます。
これからもこんな作者をよろしく願います 堅

序章（前書き）

最初は甘くなっています。

序章

序章

霧雨魔理沙は魔法使いである。

これは職業としてであり、種族は人間である。年頃の少女、というやつだ。自分で言うのもなんだが。そして私は自宅を勘当された身であるから、里にはめつたに顔をださない。それ故、一線を守るまでもなく誰からも遠い。

アリス・マーガトロイドは魔法使いである。

これは種族としてであり、職業でもある。寿命などは人間と比べるまでもなく、永い。それ故人間と交わるのは小数であり、アリスはその小数に近いものがある。されども、決定的な一線は遠く、堅く閉ざされている。

二人は交流こそすれども交わることはなく、それぞれの時間を過ごす。もし交流したとしても、それは魔法使いとして。そのはず、だった。

序章（後書き）

まあ、実際は連載にしてもそんなに長くないのですが。

始めてしつかりとプロットを組んで書いた作品のためか、とても細かく章分けされています。ホントすごく短く。

なのでその章ごとに出していることと思いますのでそこその量になると思います。

第一章（前書き）

最初の方はかなり章分けがアバウトだったりします

第一章

第1章

二人が出会ったのは魔法の森の小道だった。

アリスは里で人形劇をしている。生活費のためだ。そしてその人形
の材料を里で買った。までは良かったのだが、帰りに特殊な素材で
出来た糸を落としてしまったようだ。それも箱ごと。割と高い
ものだったので探しに魔法の森を歩きまわっていた。

気がつくとも既に辺りは暗くなっており、木々の間から満月が覗いて
いた。

「しまった……。燃料が無いじゃない」

ランタンを灯そうと思ったのだが、中身は空だった。

しばらくしてその糸を入れておいた箱を見つけた。その中は赤い糸
なのだが糸はどこかに伸びていた。引っ張っても手ごたえがある。
切れたら悲しいし、辿ることにした。

しばらく糸を辿って歩いていたら何者かの気配を感じた。と言うか
なにかがいた。それは黒い塊に見えるけど、ところどころ尖ってい
る様に思える。その尖った先に糸は絡まっていたようだ。実際暗く
てようわからないけど。しかももぞもぞと蠢いている。

アリスは念のため人形を射撃体勢で背後に控えて近付くと、それは
唐突に立ち上がった。突然だったものだから小さく声をあげてしま
った。

「ひゃッ……！」

「うお!？」

その塊は黒衣に身を包んだ人のようだった。その手にはキノコと
ごつごつしたなにかが握られており、そのなにかをこっちに向けて

きた。私も反射的に人形を目の前に突っ込ませていて、出てきた断幕と人形がぶつかり大きな音を立てた。

糸を回収し、お互いに自己紹介と事情説明を行いながら共に道を歩く。

彼女は霧雨魔理沙という魔法使いだそうだ。種族は人間だろう。キノコを採取に来ていたそうで、同じ魔法の森の住人だそうだ。

まあ、近所の者のようだし、仲良くしておいて損はないだろう。そう思っていたのが1月程前。

現在は軽く後悔している。

今では襲撃されては魔導書やら魔導具を強奪していくのだから。

そして現在。私は魔理沙の家に来ていた。いつも魔理沙がそうするように断りを入れずに来てみたのだが、流石に窓を割って入るのは気が引けるので玄関のチャイムを押した。

反応が無いので、少しドアを引くと、簡単に開いてしまった。

なんかミステリー小説みたいなお展開ね…。

そう思いながら、足を踏み入れる。すると床に投げ出された足が見えた。そして匂ってくる鉄のにおい。

え？

まさか、そんなことはないわよね？

ゆっっくりと覗き込むと、そこには…

うつ伏せに倒れて、ぴくともしない魔理沙

乱雑に開かれた魔導書

そしてなぜか大量の鉄くず（一部さびていたり、火にかけられていたりする）

…。まさかとは思ったが、そんなことはなかった。

魔理沙は爆睡していた。開かれた魔道書には錬金術について書かれており。魔力伝導のいい金属を錬製しようとしていた事がわかる。完成品も失敗品も大量にあり、並大抵の時間と労力では到底出来ない量である。そういえば三日程前にうちから人形にもたせていたら折れてしまった剣を持っていつていたが、それ以来ずっとこもっているのだろうか。

「うんん…」

どうやら目を覚ましたようだ。

「ん？アリス？」

「ええ、おはよう」

「……。なんでここにいるんだ」

「別に良いじゃない」

「勝手に入るなよ」

「魔理沙にだけは言われたくないわね」

少し硬直していた様だが、会話を交わしながらも火を止め、窓を開ける魔理沙。

「あ、そうそう昨日は。ありがとな」

「なにがよ」

「あの剣」

「…。あの剣を持っていったのは三日も前だけど？」

「そんなに経ってたのか。気がつかなかったぜ。道理で腹も減るわけだ」

…。今何と？道理で腹も減るわけだ？もしかして何も食べてない

？そんなに高度な術式じゃないにしろこんなにも大量に錬製をおこなったのに？魔法使いと言っても彼女は職業であってまだ人間の筈だけ…。

彼女はキノコを帽子から取り出し、齧りつきながら私に問いかけた。

「ありふはほうひてここに？」

「先ずは呑み込みなさいよ」

「ん……。で、アリスはどうしてここに？」

「魔理沙の真似してアポなし訪問してみただけ」

「ちよつと勘弁してほしいぜ」

「そう思うなら今度から口約束でいいからアポとりなさい」

魔理沙は少し頬を膨らませながら帽子からキノコを取り出し、齧りついた。

「で、今日はなんか都合悪いの？」

「… 客人が来るんだ」

「そうなの？魔理沙が人を招き入れるなんて以外ね」

「… 私は招いてないけど、押しかけてくるそうだ」

魔理沙は一つ嘆息すると帽子からキノコを取り出し……。

「どれだけキノコ入ってるのよ！」

「ん？この帽子は魔導具の一つだけ？たくさん入っても不思議じゃないぜ」

そう言う事を言ってるんじゃないのに……。まあいいわ。

外では風が強く吹いていた。

「… はあ。で？誰が押しかけてくるって？」

「あ、… 新聞屋の鴉天狗だけ」

「ああ、射命丸文だけ」

「そう」

魔理沙は肯定しながら帽子からキノコを取り出した。そして私に差し出した。

「ゴシップのネタにされたくなければ帰った方がいいぜ。キノコやるから」

「別にやましい事なんてないから大丈夫よ。キノコも別にいいわ」
「そんないかにもな毒々しい色のキノコなんて、どうすればいいかわからないし。」

魔理沙はそのキノコを帽子にしまい、別のキノコに齧りついた。どうやら食用ではなかったようだ。そして唐突に魔理沙は外に歩きだした。

「ちよつと、どこいくのよ」

「ネタに飢えた記者のおでましだぜ」

その背中は少しげんなりして見えた。

魔理沙と共に外に出ると、そこには文がいた。

そして私の姿を捉えると、目を輝かせながら魔理沙に詰め寄った。

「また鞍替えですね！」

「違う！」

「例の妖精との失恋報道から四日で次の人を連れ込むなんて、やるじゃありませんか」

「その報道だつてガセだつただろうが！」

「しかも相手は魔法使いですか。1年経つてもあの大図書館が忘れられないんですね」

「あいつとも何もなかった！」

「振られるのが早かったですし、仕方無いかと」

「だから！違うっていつてるだろ！」

…。なんか、魔理沙が可哀そうになってきたんだけど。

あ、魔理沙。八卦炉取り出した。

「ああ、もう！一旦黙れえええええ！」

第一章（後書き）

こんな感じで進めていきます。

第二章（前書き）

アリスの気持ち。

それに気づくとき。

第二章

第2章

私は家に帰ってもなにかすっきりしなかった。

原因は分かっている。文が魔理沙に投げかけた言葉、そして魔理沙の反応。

顔が赤かったのは怒っていたからか、それとも。

ぐるぐると詮無き思考はめぐるめく。

私は、魔理沙の事をどう思っているのだろう。

知り合ってからそんなに月日がたった訳でもない
関係が変わるような出来事があったわけではない。しいて言えば毎
日のように彼女が襲撃してくることぐらいなものだろう
でも、きつとそれが原因なのかもしれない。

彼女は毎日現れた。

私の生活の一部になった。

だから欠けたら違和感があるし、かけがえのないものになった。

そんなことでこんな感情を抱くだろうか。

それを言えば、里の人間だって毎日会っている。

私から会いに行っていることを考えれば相手は里の人間の方がしっ
くりくる。

でも里の人たちは不特定多数の人。

魔理沙は特定の一人。

この差が感情の抱くか否かの境界だとしたら。

私は、とんでもなく軽い女ではないか。

だって毎日会うだけで惚れてしまうのだから。

ここまで考えて、ふと気付いた。

“惚れてしまう”？私は魔理沙に惚れているのだろうか。
無意識にそう思っていた。

それは意識の更に奥にある、本心で真実なのだろう。

私は霧雨魔理沙に、恋をしていた。

第二章（後書き）

暫く甘仕様は続きます。

第三章（前書き）

魔理沙の気持ち。

二人の気持ちが重なる時。

第三章

第3章

思えばこの気持ちはいつからだっただろう

最近の私は事ある事にあの人形師が頭をよぎり、思いはせていた。そのせいかこの所彼女の家に詰めていたのも確かだ。

それにいかに研究が魔法使いの本分だといつても三日不眠不休、食事も取らずに研究に…しかも私の魔法に関係のないことに没頭するなど、以前の…いや今の私でも考えられない。このまえ…確か昨日あたりにあの鴉天狗に心配されてしまったのも、無理はないだろう。アリスが帰った後に鏡をみたら酷い有様だったし。第一私はまだ人間なんだからそんな事は絶対に無理だろう。もしかしたら二日研究してもう一日は丸ごと寝ていたのかもしれない。

こんなにも心乱されているのはアリスが私の心に居座っているからであり、それを不快に思っていない自分がいるのも確かだ。

これは恋なんだろうか

私の魔法は星の魔法だけどスペルカードにはしつかりと恋を刻んでいる。もしこれが恋ならば、私は言葉の真意さえ知らずにいた痴れ者ではないか。これじゃああの小悪魔に笑われるな。

私がこんな風に彼女に夢中になったのはいつからかと考えたら全く持って見当がつかない。最初からこんな感じだった気もするし、認識が変わるようななにかが有った訳でもない。もしかしたら一目惚れだったかもしれないし、ゆっくりと恋に落ちたから気がつかなか

ったのかもしれない。いまではどっちでもいいような気もする。だって私のなかには彼女で満たされていて、それで私は満足なのだから。

そんな事を考えていたものだから、彼女がうちに現れた時は心臓が飛び出すかと思った。なにせ研究に没頭し、気がついていたら目の前にアリスが居たのだから。なんとか一人になろうとして客人の予定など無いのにハツタリをかまし、窮地に迫った時に外に見えたあいつの名前を出した。だからある意味あの鴉天狗が来たのは僥倖ともいえる。

でもあんなことを、しかも本人の前で言われてしまつてはたまつたもんじゃない。しかもあいつの事だ、絶対に記事にして、配つて回るだろう。今まではガセネタだったから否定して回れたが、今回はそうもいかないし。それにアリスの反応も少し気になるものが有るから、放置するのもし一つの手かもしれない。その先は一方通行になるけど。まあ、その辺は新聞の内容次第だろう。

かくして件の新聞は取材が終わつてから15分程で届いた。

内容は…。誇張がすぎるだろう。第一アリスに妊娠説とか私もアリスも女なんだからもし子供がいたら第三者の登場になつてしまうだろうに。しかも式の予定まで書いてあるよ、来月とか早すぎるだろう…。

これは放置するわけにもいかない。どうしたものか。新聞のことは知らないふりでもしとこうか。とりあえず新聞を玄関に戻し、高級品の紅茶 アリスの家から借りてきたものだ。 を入れる。

そしてテーブルに着き、一息いれてから香霖の日記を読む。にしてもこのあたりは「何もなし」ばかりでつまらな…

「魔理沙！どういうことなの！？」

だれか来たみたいだな、と言うかアリスだろう。

「どうした、アリス」

「どうした、じゃなくて。新聞読んだでしょ」

「新聞なら玄関だぜ」

嘘はついていない。

するとアリスは自宅から持ってきたであろう新聞を突き出してきた。読め、ということだろう。既に読んだ内容だが、さっと目を通す。ここは冷静に行こう。

「で？」

「それだけ？」

「うん」

「私が妊娠したことになってる事とか、魔理沙の気持ちとかに反応はないわけ？」

「アリスは妊娠しそうにないし、どうせ相手もいないんだろ？それに全部が間違いじゃない」

しまった。冷静に行こうとしすぎて口が滑った。ま、まあ。明言した訳じゃない。ばれないことをいのり……。

「魔理沙……」

無理でした。

アリスが「まさか……」みたいな目で見てますよ。完全にばれました。隠す事もないんだけどさ、いつかは伝えようと思ってた事だし。でも、いざ伝わると恥ずかしいな。

だんだん顔が熱くなってきた。

「魔理沙……」

「ん？」

「私、魔理沙のこと、好きだよ」

私はその言葉をなんとなく予測していた。自分でもびっくりする程度には冷静だと思う。顔は赤いけど、取り乱していない点では。だから今なら言える気がした。

「私も、だぜ」

それでも、実際に言ってみるとこれ以上なく恥ずかしかったけど。

第三章（後書き）

はい、甘いですかね。

実際この「いつまでも」は既に完成してたりします。

ですが、「一気に読むと甘すぎる」とのことですので区切っています。

第四章（前書き）

二人の気持ち。

そして変化の予兆。

第四章

第4章

こうして実際に交際を始めた訳だが、人前で一緒に歩くと新聞に変な信憑性が出てしまうので別行動を心がけていた。完全なガセマで信じられたらたまったもんじゃない。

現にこの前人形劇の後片付けをしている間に寺子屋の先生に「いつの間に相手を見つけたんだ？やるじゃないか。相手は私の知ってるやつか？」なんて聞かれてしまった。新聞のことを言っているようなので否定しておいたが、正直疲れる。相手が良い人であればあるほどいい。

正直以前と変わらない生活を送っている。たまに魔理沙がやってきて、同じくらいたまに魔理沙の家に向かう。それだけ。変わったとしたら会話の内容ぐらいかしら。

いや、最近は個人的な事だけど研究中の環境が変わった。以前は完全に無音の静謐な中でやっていただけのだけど、たまに魔理沙が香霖堂から持ってきた機械にリリカとミステアの音楽を入れて聞くようになった。なんだか少しくらい周りに音があった方が集中出来る様な気がしてきたから。基本的には静かな所でやっているのだけ。

あと一つ。最近になってようやく完全自立式の人形の実験が少し進んだ。…と言ってもまだ完成はしてない。それにこれはいわゆる「コピー」を作り出す術式。今回はその辺の兎を持ってきて、兎の形をした人形に意識をコピーする。そして別々の場所で同じ刺激を与える。そうして反応を見たり、出来ればコンタクトを取って情報を集めてみようと思う。

今回は意識を一度剥離して魔力の数値に変換、複製し意識を再構成

するといった段階を取ってみようと思っていて、今はまだ意識の剥離作業の大まかな定義付けが終わった所だ。

時間はかかるけど、机上の空論を捻り続けるよりかはよっぽど有意義でしょう。失敗したとしても学べることはあるでしょうし。

焦っても仕方ない。ゆっくり組んで行きましょう。

しばらくして毎年恒例の宴会のお知らせが来た。そう言えば前から魔理沙はこの宴会の幹事をしていた気がする。場所は…博霊神社？霊夢が許可したのかしら。魔理沙もいるし今年は参加してみようと思った。

第四章（後書き）

はい、この辺りから徐々に変化が起きていきます。
まあでも、まだまだ先は長い（？）のでごゆるりと。

第五章（前書き）

霊夢は商売モードだったりしますWWW

第五章

第5章

春の博霊神社：と言っても花見の季節はとっくに過ぎている。梅雨になる前にひと騒ぎしておこうという魂胆のようね。私は基本的に騒がしいのは嫌いなんだけど、魔理沙と付き合い始めてから嫌いではなくなっていた。むしろ周囲の人間、妖怪その他諸々と親交を深めるのは悪くないとさえ思っている。なんだかねで助け合ったり出来るでしょうし。

神社に向かうと既に宴会は始まっており……と言つか参加者の大半は既に出来上がっていた。開始5分前に来てみたはずんだけど……きよろきよろと視線を巡らせながら縁側に座り、萃香から御猪口と徳利に酒を貰う。

「なくなったら言いなよ」

「ええ」

「おい、萃香！こつちも注いでくれ！」

萃香は完全に出来上がった魔理沙に呼ばれるとそのままふらふらと宴会の輪の中に戻っていった。そして入れ替えに霊夢がやってきた。

「アリスが宴会なんて珍しいじゃない」

「私だって酒くらい飲むわ」

「家で一人でワインとか？」

「洋酒だけじゃなくて焼酎とか清酒とかもあれば飲むわよ」

「ふうん。むしろ賑やかな所に来る事の方が珍しいか」

「まあ、それはそうね。でも私だって周囲を拒絶してるわけじゃないんだから、たまにはこうして親交を深めたりしたいとも思うのよ」

「へえ。」

霊夢は興味を失った様で割とどうでもよさげに相槌を打つと「あ、そうそう」と話題を変えてきた。

「アリス、このお札買わない？」

「なに、それ？」

「入口に貼ると室内に沿って結界を張る御札なんだけど」

「結界張ってどうすんのよ。室内で弾幕するわけでもあるまいし」

「弾幕もできるし、外の音も完全に断てるし。内部、外部からの衝撃にも強くなるし」

「室内で弾幕したら家財道具が壊れるじゃない」

しかしアリスは内心で少しその御札に惹かれていた。今回の研究は意識にまで介入する危険な術式。だから絶対に邪魔が入ってはいけないし暴走した時に何が起こるか分からない。だからその結界は保健として優秀に思えた。

「で、いくらで売ってるの？」

「買ってくれるの!？」

「値段次第ね」

釘をさしておかないととんでもない額を突きつけられるかもしれないらしい。

「そこはアリスの方でも組んでくれないかしら、7貫文ぐらい」

「6貫文なら」

「6貫文は安いわよ」

「いいえ妥当よ」

「安い!」

「ちようどだつて言ってるでしょう!」

「こうなったら弾幕で決めるわよ」

「やってやるうじゃない」

~~~~少女戦闘中~~~~

「よっし、私が勝ったから7貫文でいいわね」

「うう、この強欲巫女」

「とにかく7貫文でいいわね」

「払うから待ってなさいよ、少しくらい」

全く、神社の中だから手加減してあげたって言うのにあんなに本気の弾幕張らないでも…。にしても、ホントに部屋には傷一つないわね。性能は信頼できそうね。

アリスが御札を買って部屋を出ようとして御札をはがすといきなり障子が倒れてきた。そしてその上には魔理沙が乗っていて、ルーミアが魔理沙の上に乗っていた。

これは…どう言う状態なのだろうか。

「あいたたた…。上をどいてくれ、ルーミア」

「わはー。下敷きなのかー」

「で、何してたんだアリスと霊夢はこんな密室で、二人きりで、誰にも言わずに、こそこそと！」

「魔理沙、怒ってる？」

「今は何してたかを先に答えろお！」

「こたえろー」

やっぱり酔っ払いだった。これは、魔理沙は嫉妬してるの？それとも疑ってる？

「魔理沙、あのね…」

説明しようとした私の声に被せる様に霊夢がしゃべりだした。

「そんなの恥ずかしくて人に言える訳がないじゃない」

何を言ってるんだ、この巫女は。

「寝とられなのかー」

「霊夢、お前…私のアリスに手をだすn…おえええええ！」

激昂して叫ぼうとして…思いつきり吐いていた。

「あんだねえ…ッ！」

「うゝえええ、気持ち悪…」

「悪酔いなのかー」

「出てけええ　　ッ！」



霊夢の怒声が境内に響き渡った。

私は御札で密室にした研究室に籠り、術式の礎の部分までは術式を組み終えた。

なんだかんだでかなりの間、研究と魔理沙と会う事しかしてない気がする。

だから食料も生活費もかなり厳しくなってきた。近いうちにまた人形劇をしに行かないと。でも今日はゆっくりしましようかね。

## 第五章（後書き）

一応この話は布石になったりします。

ちなみに作中の「貫文」はお金の単位でyahoo!知恵袋の方で他ユーザー様の質問の回答から拝借しました。

`http://detail.chiebukuro.yahoo.  
co.jp/qa/question_detail/q1227  
633857`

一応そのページをぺたりと。

## 第六章（前書き）

変化を始める日常。

きっかけは些細なことから。

## 第六章

### 第6章

「人形劇が…?」

「うん。最近ぜんぜんやってないの」

「へえ、なにかあつたの?」

「知らないよお、というかその辺は阿求ちゃんのほうが詳しいんじゃないの?」

「あいにく情報は無いんだよね」

「そっかー」

私、稗田阿求は里に来ていた。

そして花屋の前を通りがかった時に、看板娘の彼女に人形劇が行われていない事を聞かされました、が。きつと次の一言は……。

「阿求ちゃん!なんとかして!阿求ちゃんしか頼れないの!」

やつぱり。まあ、それで断らない私も大概だとは思いますが。

いくら非力な私でも誰かの役に立てるのは嬉しいから。あ、一応言っておくと里の人間限定で。妖怪は一部を除いて口クな話持つてこないし。

とはいえ、どうしたものでしょう。たしかあの人形師は魔法の森に居を構えていた筈です、が。私一人であそこまで行くのは至難の業……いや、無理です。無理です。大事なことなので二回言いました。魔法使いと言う種族は社交的なものは少ないので、おそらく友好関係もさほど広いとは思えません。…そう言えば彼女は最近「文々。新聞」で霧雨魔理沙との熱愛報道がありましたね。彼女ならコンタ

クトを取っているでしょう。私が向える範囲で霧雨魔理沙が現れそうな所へ行ってみましょうか。

家を勘当されているのでこの辺にはいないでしょう。となると博霊神社と香霖堂くらいしか心当たりがありませんが、とりあえず行きましょう。博霊神社は遠いですし。第一スキマの妖怪に出くわすかもしれないので、香霖堂ですかね。

かくして香霖堂にやってきましたが、太陽は頂点を少し過ぎた頃です。あまりゆっくりしていると夕ご飯に間に合いませんのでさっさと用事をすませましょう。

香霖堂の扉をあけると店主はおらず、まるでその代わりとでも言うかのように黒い三角帽が置かれていました。これは魔理沙の物ですが、肝心の当人はどこでしょうか。商品でも見ながら時間を潰そうかと思つて棚に目を向えました。するとそこにある鏡に窓に貼りついて店内を覗き込む魔理沙の姿が有りました。

「なにやつてたんですか」

「いやなに、稗田の当主がなにかやらかさないかと見張つてたんだぜ」

「性根がひん曲がってますね」

「腹黒よりかはマシだと思つが？」

「そうでした。こんなことを話しに来たんじゃないんですか」

「そうそう、魔理沙さん。本題なんですけど」

「私にか？」

「はい。最近アリスさんが人形劇をやつてないみたいなんですけど、なにか知りませんか？」

「あいつにだつて研究に没頭する時期ぐらいあるだろう」

「まあ、そうでしょうか。様子を見に行つてくれませんか？」

「なんで私なんだ」

「ほかに友好関係が思い当たらなかったもので」

「酷い言い草だな」

事実ですし。

「ま、いっだけ行ってみるか」

こうして私と魔理沙さんによるアリス家訪問が決定したのです。

## 第六章（後書き）

阿求の登場です。

と言うか今までの作品で阿求のものだけ伸びがいいんですが、阿求ってそんなに人気だったんだろうか…。

## 幕間

### 幕間

アリスは安堵感に包まれていた。なぜなら術式の中でも難関の一つと目していた「意識の剥離と解析」を無事に組み終えたからである。安心したら腹が減って、食事にしようと思えば、キツチンにむかう。そして今更ながら食材が全くなく、しかも一文無しな事に気がついたのである。仕方ない。今から里に行つて人形劇を行つても、収入はあまり期待できないだろう。準備して向かつて着いたころには寺子屋の授業は終わり、子供たちはみな遊んでいる頃だろうから。今日はキノコ料理で我慢しよう。そう思ったけど…食用かどうかなんて分からないし、魔理沙の家にも行ってこようかしら。そう思つてアリスは家を後にした。



## 幕間（後書き）

ちよつとした幕間です。

あ、一応第七章は別でだしますよ。

## 第七章（前書き）

すれ違う二人（物理的な意味で）

## 第七章

### 第七章

「ここがアリスの家だぜ」

「随分奥の方に居を構えてるんですね」

「そうか？ 私はもつと奥だが？」

「まあ、貴女ですし」

「振り落とそうか？」

「止めてください。死んじやいます。幻想郷縁起が途切れちゃうじやないですか」

そんな風に阿求と軽口をたたきながらアリスの家の前にたつ。

なんだかんだで最近ではアリスの方から来てもらってばかりだったから、なんだか久しぶりな気がするな。

玄関は…あいてないな。よし。

「開いてないんじゃ、仕方ないですね。また今度」

「仕方ないからこつするぜ」

「ちよ…！ 魔理ス」

「うりゃあー！」

ガシャン

「よし、入るぞ」

「な、何やってるんですか！…私、何言われても知りませんから」

“粉々に割れた窓”を踏みつけながら室内に入る。

しかし、ホントに見当たらないな…。

「こんなことまでしなくても、いいじゃないですか…」

「研究室かもしれないな、行ってみようぜ」

「帰りましょうよ」

「お、開いてる開いてる」

足取り軽やかに進み、部屋の中央まで進むと…

「魔理沙さん！足元！」

「ん？」

私の下にはやたらと複雑で豪勢な巨大な魔法陣があり、私が放つ魔力に反応して光り輝いているようだった。

そして光は強さを帯びて……視界を真っ白に染め上げた。

私は暗い空間に漂っていた。

それはまるで光と言う概念が欠如したような、完全な暗闇。

しかし、魔力の流れだけは感じる事が出来る。

その流れを辿ると魔導言語のようだが、なにせ現れてから消えるまでが早すぎる上に高速で移動しているのだから読めない。

この空間はどこまで続くのだろうか。

マジックミサイルを撃とうとしたけど…腕がどこにあるか解らなかった。

それどころかだんだんと自身が曖昧にしか認識できなくなる。

自分が分解されていくようで、怖い。

しかし、分解された「私」はもとの形を取り戻しつつあるように思えた。

いや、「私」は確かに霧雨魔理沙の形をしていた。

そこまで来て、正常な思考がよみがえる。

そして、かつて読んだ魔導書の一節が頭に浮かんだ。

「魂の解析」

「解析された魂は、術式が完全であれば精神の糸を辿り、自らに還る事が出来る」

どこだ。

その糸とやらはどこだ。

いくら探してもあるのは暗闇で。

ただ一つ浮かぶ魔法陣と繋がっている、

事切れたように座り込む人形だけが、

まるで「私」を取り込もうとしているかのような眼で見ている。

そして「私」は消え入るような暗闇に耐え切れず、

その人形にずがってしまった

そして散り散りになって飛んでいくような感覚に包まれていった。



## 第七章（後書き）

はい、いきなりシリアスです。

まあ、前々から言っただけだったのでそんなにいきなりではないかもしれませんが。

## 第八章（前書き）

ちなみにここからは砂糖はない…かなあ。



## 第八章

### 第8章

「誰なの！」

私は魔理沙が家にいないので、自宅に帰って来ていた。そして割れたガラスと溢れだす魔力を前にして、家に駆け込み叫んでいた。そんなバカな。

あれを動かすには魔法使いの魔力が必要で、図書館の魔女が来るとは思えないから起動したのは魔理沙になる。

しかし彼女とて未完成の術式に魔力を流す程バカじゃない。そんな事したら暴発するのは目に見えているのだから。

じゃあ、どうして。

どうして魔理沙は魔法陣の真ん中で倒れているの…？

「アリスさん」

びっくりして声のした方を向くと呆然とした阿求が立っていた。

「ごめんなさい、私は止めなかった…。私が頼まなければ、魔理沙さんはここにはいなかったのに…」

「どうということなの？詳しく説明して頂戴」

阿求はうつろに一つ頷くと、その場に座り込んで話し始めた。

彼女の話 요약すると

「里の子に人形劇がやってないのは何故か調べてほしいと頼まれ、魔法の森に入るために魔理沙に協力を仰いだ。しかし不在のため帰ろうと言ったが魔理沙が勝手に入ってしまい一人で外にいるのは危険だと思って中に一緒に入った。暫く探索していたら研究室に辿りつき、魔理沙が魔法陣をふんだら魔力が流れ出て魔理沙が倒れ、アリスがやってきた」といった具合だった。

迂闊だった。本来は動物で実験しようと思っていたから重みを感じして発動するように組んでいたんだ。いつもなら組み終わるまで部屋を出ないから、第三者が組みかけの魔法陣に触れるなんて、想定してなかった。

この術式は魂の剥離解析までしか組んでないから、精神の系の接続もしてないから魔理沙の意識は出てこれないかも知れない。いや、精神の系ならここにもあるじゃない。

私は魔理沙の体に精神の糸を括りつけて魔法陣に接続しようとした。しかしその時、地震が起こり、棚にあった人形が落ちてきて、魔法陣に触れた途端に大量の魔力が流れ込み、人形が散り散りに飛び散った。

私はその中に、魔理沙の意識が有るような、そんな気がした。

その場には呆然とした少女が二人と、倒れ臥して事切れた様に眠る少女が一人。

外には初めて出会った時の様な、満月の夜の帳が下りていた。

## 第八章（後書き）

なにかしたいんでしょうね、  
作者は。

## 第九章（前書き）

魔理沙はどうなってしまっのか…？

## 第九章

### 第9章

私は、散った人形の中心で座り込んでいた。

散った瞬間に感じられた魔理沙の意識のような不確かななにかも、今は感じられない。しかしさっきから人形と目が合う気がする。私は今はもう術式を組む気にもなれず、散り散りになった人形のかげらを集めて、一つずつ縫い合わせていった。

胴体に頭を着ける。

膝を縫い合わせ、腿からでた綿を入れて閉じる。

四肢を体に縫い合わせる。

こうしてみると、人間の関節に当たる部分だけが爆せていることが解る。まあ、解った所で何にもならないんだけど。

こうして人形をもと通りに戻した時に声を掛けられた。

「その人形に、魔理沙さんがいるんですか」

「散った瞬間は、ね」

「今は」

「さあ。感じられないけど？」

その時、阿求の目に少しでも光が戻った気がした。

「その人形、動かせますか？」

「誰に言ってるつもり？」

そう言っただけで人形にアクセス……。おかしい、繋がらない。アクセスすることすら適わないなんて、まるで生身の人間を相手にしている

みたいで…生身の…人間？

魔理沙がこの中にいるって言うの？

「ねえ、魔理沙…？」

人形は微動だにしない。

「中にいるの？」

感情すら感じられない。

「魔力を流せば、動くから。反応してよ」

それでも反応はない

「アリスさん…」

「駄目ね。意識は入ってない。もしくは入っても魔力がない」

安らかな寝息を立てる魔理沙の身体に目をやりながら、二人は過ぎゆく時間を過ごしていた。

## 第九章（後書き）

一応クライマックスになるんでしょうか。

## 終章（前書き）

ついに今作も完結です。

明日からは今まで通り短編に移行しますのでそちらもぜひどうぞ



## 終章

### 終章

あれから130年がたった。

不思議なことに魔理沙の身体は息をしている。

いや、息だけをしている。

まるであの術式を身に受けて時を失ったかのようにあの頃の姿のまま。

しかし目覚める兆しも、手段もない。

誰も、彼女を目覚めさせることはできなかった。

だからせめて、彼女が入っているであろう人形と魔理沙を糸でつないでいる。

未だに、いや。もう諦めるなんて、出来そうになかった。

そう言えばもうこんな時間になっている。

そろそろ“彼女”が、10代目阿礼乙女の稗田阿都がうちに来る。

彼女の姿はともあの事を思い出させる。

そして阿都もまた、阿求の日記を読んだそうで、この事については知っている。

最近では私の所に来ては昔の魔理沙の話聞かせてほしいとせがんでくるので、私の愛した彼女の事を余すことなく伝えている。

そして今日もまた、古い記憶に想いを馳せる。

私は何度も何度も、永遠に。

在りし日の魔理沙に恋をするのだろう。

F  
i  
n

## 終章（後書き）

と言う訳で魔理沙は生き返りませんでした。

いや、ハッピーエンド もあったんですがそっちはですね書いてて  
收拾がつかなくなりまして、こうなりました。

前書きでも言いましたが短編の方もよろしくです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6898t/>

---

いつまでも

2011年7月27日22時35分発行